

最初は足音しか聞こえなかった。姿が見えるようになるまで、かなり長い時間がかかった。

その足音も、初めのうちは遠くで聞こえていた。生徒たちがいなくなったあとの長い廊下に、高い天井に、ほんのかすかに響く足音。がらみなどの校舎のなかでは、小さな音が、思いがけないほど遠くまで聞こえる。

一度、静まりかえった放課後に一人残って、集団検診の記録を整理しているとき、どこからかクラッカーを鳴らす音が聞こえてきて、気になって仕方なかったことがある。わたしが子供のころ、爆発的に流行った玩具だけれど、今の子供たちが持っているわけではない。何か別のものが出している音だろう——そう思った。

でも、どう聞いてもクラッカーの音にしか聞こえないその音は、ときどき休んだり途

切れたりしながらも、延々と続いた。とりわけ神経に障るわけではなかったが、(本当はクラッカーかしら)という好奇心に負け、保健室を出て、馬鹿馬鹿しいと思いつつも、校内をくまなく探しまわった。そして四年生の男子が二人、裏庭の隅で夢中になってクラッカーを鳴らしているのを見つけたのだった。

(めずらしいわねえ。おうちにあったの?)

(うん。お母さんが物置を片付けてたら出てきたんだよ。先生、これこうやって遊ぶもんでしょ?)

二個のプラスチックの球に長い紐をつけただけの、ごく単純な玩具だが、それがたくさんの人々を魅了したこともあったのだ。わたしもその一人だった。

(先生、どうして僕たちがここにいるってわかったの?)

(音が聞こえたから、ぐるぐる探したの)

(へえ。保健室まで聞こえたんだ。すごいね)

(懐かしいわ)

(ちょっとやってみる? やってみせてよ、先生)

十数年も昔に戻ったつもりになって、子供たちと一緒に遊びに興じた。

(思い出してもらって、このおもちゃもうれしいだろうね)

子供の一人がそう言い、一人は笑った。

(先生、これ一生懸命鳴らしていたの？ 信じらんないなあ。先生がこんな簡単な遊びに夢中になっちゃったなんてさ)

(ホントね。今考えると不思議だわ)

わたしが保健室に戻ったあとも、子供たちはまだ遊び続けていた。カチカチカチ。過去からやってきたせわしなない遣いが、そこで踵を鳴らしているかのように。

ドアを開けて。思い出して。ずっと待ってたんだから。

あの足音も、それとまったく同じだった。

初めてそれに気がついたときも、わたしは一人で居残り仕事をしていた。その月の終わりに、秋に行なうインフルエンザの集団接種について、父母を集めて説明会を開くことになっていたので、資料をつくっておく必要があったのだ。

わたしは会議室にいた。たくさんの資料を、二十数部ずつコピーにとり、それを広い机の上いっぱい並べて、順々にそろえてホチキスで綴じる。単調な手仕事で、頭は使わない。だからわたしは別のことを考えていた。

人を殺せたらどんなにいいだろうと思っていたのだ。

殺したいと思う相手は、一人だけだった。若い女だ。わたしよりもっと若い。でも車の免許をとれないほど幼くはなく、車を転がして人を殺すことができないほど若くは

ない。事故を起こしたとき、彼女は十八歳と三方月だった。

彼女に殺されたのは、わたしの婚約者だった。挙式まであと一カ月というときに、一方通行の標識を見落として走ってきた彼女の車に、まともにぶつけられたのだ。

そこはT字路で、彼はちゃんとカーブミラーを見ながら、ゆっくりと車を出そうとしているところだった。彼のよく知っている道だった。左から右への一方通行で、だから右から車が来るわけではないと思っていた。それなのに、女の車が右側から衝突してきたのだ。

あつという間だったから苦しんではいないだろうと、医者は慰めてくれた。とんでもない不運だったと、警官は辛そうな顔をした。あとになって気がついたのだが、警官がそんなにも気の毒そうな素振りを見せたのは、事故がどういふふう処理されるのか、よく承知していたからだのだ。

十八歳と三方月の女は、たいした罪に問われなかった。最初のうちだけは、法も彼女を責める仕草を見せたけれど、それは形だけだった。彼女は未成年だから、免許をとってひと月半だったから、一方通行を無視しても、制限速度一〇キロのスクールゾーンを四〇キロで走っていても、誰も文句が言えなかったのだ。

彼女が人ひとり殺しても、誰も文句を言えなかったのだ。

最初から最後まで、彼女はわたしに謝らなかつた。ただ青い顔をして、紳士面をした

父親に肩を抱かれ、黙っていただけだった。通夜にも葬儀にも出席せず、会うときはいつも弁護士と父親の陰に隠れて、きれいに化粧してマニキュアを塗っていた。服装も、いつも完璧に整えて、ときどき涙をふくために取り出すハンカチも、ちゃんとブラウスの色と釣り合っていた。ストッキングにも伝線ひとつなかった。

彼の両親が示談の条件を呑んだので、わたしにはどうすることもできなかった。わめいたり叫んだりすることさえ、人前ではできなかった。そんなことをすれば、残された家族を余計悲しませるだけだ、と言われて。

わたしにも、いくばくかの慰謝料が支払われることになり、ちつともそうしなくなかったけれど、わたしはそれを受け取るようになった。だが、そんな金などもらったところで意味は感じなかったし、それに縛られるつもりもなかった。そっくりそのまま交通遺児の育英基金に寄付して、わたしは自分なりの決着の付け方を考えた。

ひと言でいい、謝らせたかった。もう二度としないと言わせたかった。彼の生命とわたしの将来を、金で処分したと思わせてなるものか。それだけだった。

だからわたしは彼女を追いかけた。大学へ、自宅へ、アルバイト先へと足を運び、彼女が本当に自分のしたことの重大さを悟るまで、姿を見せつけてやるつもりだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。